

かわさき生ごみリサイクル交流会だより

NO.2

2014年1月

発行：かわさき生ごみリサイクル交流会実行委員会

第2回かわさき生ごみリサイクル交流会～生ごみを活かす 2013年12月1日 開催

13の市民団体等で構成する実行委員会と川崎市環境局の主催により麻生区役所第1会議室で開催され、93名が参加し、とても盛況でした。第1部の「コンテナで野菜をつくろう」では、有機無農薬で安全な野菜の作り方を講演していただきました。そこに生ごみ堆肥を活用することもおすすめです。コンテナを使う方法はベランダでも気軽に楽しめます。

第2部では生ごみ堆肥を活かした野菜づくりをしている団体と個人の事例紹介を行いました。

また、開会前の区役所広場において生ごみ堆肥を活かした野菜などを販売し、あっという間に売り切れしました。

以下、「生ごみリサイクル交流会だより第2号」では、交流会の概要をお伝えします。

第1部 基調講演「コンテナで野菜をつくろう」

サクラ アキオ
講師：佐倉 朗夫 氏

(明治大学農学部特任教授・黒川農場副農場長)

日々食べる野菜を気軽に自分でつくりましょう。今日は地面が無くてもできるコンテナ栽培を紹介します。

1 コンテナ栽培の特徴

メリットとデメリット

コンテナは一般的に言われているプランターのこと。置き場所を選べるので、日当たりを求めて移動が可能で、目が行き届き細かな管理ができる。デメリットは土の量が限られる、肥料・水持ちがわるく肥えやけ、根詰まり、土づくりが難しい、土の再利用が大変である、支柱を立てにくい、野菜の種類や作付数量が制限されることなど。デメリットを工夫で克服し、メリットを生かして美味しい野菜を作ることができる。

メリットを生かすコンテナ選び

移動の容易さ、見た目、管理しやすい大きさ、土が多く入り、深さが大事。材質の違いによる容器の特性と容器の大きさで選ぶ。土の比重は容量(ℓ)の半分位が重さ(kg)になることを考慮する。ほとんどの野菜は浅広型、根菜類は深型、ハーブ類は小型で十分。

植物の半分は根であるが、その根が生きる土が少ない。このコンテナ栽培のデメリットを、良い土を使うことで克服する。良い土は水、肥料、酸素がしっかり入る有機質による土づくりを行い、効率的な施肥を行うことである。



講師 佐倉朗夫氏プロフィール

研究分野は有機農業・園芸学。神奈川県農業総合研究所、秋川牧園を経て、2007年より明治大学に勤務。2013年4月に「有機・無農薬で安心！コンテナで育てる野菜とハーブ」(講談社)を刊行。他にも有機農業に関する著書がある。

水はけ、通気性、肥料もちをよくするために下部にスノコをいれてウォータースペースをとり、上部は土を9分目までとしウォータースペースをとる。

一般的な赤玉土と腐葉土と肥料を使う土詰めの場合

- ① 下部ウォータースペースの上に鉢底石を置く
- ② 次に赤玉土をふるい、ふるいに残った中粒を入れる。
- ③ ふるいの下に落ちた細粒の赤玉土を一番上に入れる。

②で赤玉土と腐葉土(堆肥)肥料を少しずつ混ぜながら、水も加えていく。植えた後の水やりとは別に、この段階で60%を目安に水を必ず入れる。土を握った時に指の跡が残り、指で押すとさっと崩れるくらいが目安。畑のように両端を低くて畝をたてると、余分に水をやっても脇に流れていく。



2 コンテナの土づくり

土の詰め方

堆肥と肥料の量の目安

- ★標準的なもの (65 cm×22 cm×高さ 18.5 cm)
土量は約 150→1 個に、堆肥 100 g 肥料 15 g
- ★小さめのプランター (42 cm×19 cm×高さ 17cm)
土量は約 80→1 個に、堆肥 53 g 肥料 8 g
- ★菜園用浅広型のプランター (65 cm×34 cm×高さ 22 cm)
土量は約 450→1 個に、堆肥 300 g 肥料 45 g

3 野菜の選び方

野菜の連作回避年数

- ・連作可能 タマネギ、ネギ、カボチャ、オクラ、ホウレンソウ、サツマイモ、スイートコーン

※ただし土の再利用処置は必要

- ・1年休み レタス、ダイコン、カブ、ツケナ類、ニンジン
- ・3年以上 ハクサイ、キャベツ、カリフラワー、ゴボウ、ジャガイモ、サトイモ、インゲン、エダマメ
- ・5年以上 トマト、ナス、ピーマン、キュウリ、スイカ、エンドウ

コンパニオンプランツ (相性の良い作物を混植する)

- ・長ネギとの混植でよくなる野菜=ウリ科のキュウリ、メロン、スイカなど (ダイコンはダメ)。根と根が絡むように植え付けることで、互いに良い影響を与える。
- ・ニラとの混植でよくなる野菜 =ナス科のトマト、ナス、ピーマンなど (レタスはダメ)。
- ・ハーブ類、花類は、強い香りが昆虫を寄せたり、寄せ付けなかったりする。
- ・根が深く伸びるものと浅いものを組み合わせる。
- ・背の高いものと低いもので日光を効率よく当てるように組み合わせる。

4 種まき

作る野菜による栽培方に合わせて、まき方を選ぶ。

点まき・・・種の厚さの3倍の深さにまき、土をかけぐっと押えて鎮圧をする。押えることで表面が乾いていても、下から水分を吸い上げることができる。1~2株残して間引く。(マメ類)

例) インゲンは3粒ずつまき、株間が15cm間隔で育てる。

条まき・・・紙を折った中に種を挟み、割箸を使い1粒ずつ重ならないようまく。覆土をする。葉と葉が重なったら間引いていき、丁度良い株間まで間引く。間引けば間引くほど収量は増加。(葉物類)

例) ダイコンの株間20cm、
コマツの株間2~3cm

ばらまき・・・粒が重ならないように、紙と割箸で丁寧に全体にばら撒く。土を上からかける。食べ頃の葉から順次、間引く。(レタスミックス)

5 野菜苗の植え付け

良い苗を買い求めることが大事。置く場所の日当た



(終了後、ハーブティを楽しみながら懇談する参加者のみなさん)

りがよければ、5月の連休頃に植え、日当たりが良くなければ、連休後に植える。遅くなると良い苗が入手しにくくなる。4月中は霜が降りることもあるので注意を要する。

植えつけ後の灌水は葉にかからないよう、手を添えて土におとし、鉢のまわりにやる。

6 支柱の立て方

今の野菜の苗と種は品種改良されて、立って育つことが前提で、植えた後すぐに支柱をたてるが、支柱の立て方に工夫が必要。本支柱、仮支柱、連結支柱、補強支柱など作物により適切にたてる。

例) ピーマンはV字に、ズッキーニは3本の支柱で、カボチャはコンテナの4隅に行燈型にぐるぐる回りながら育て、ゴーヤは高い支柱、つるなしインゲンマメは4隅にしっかりと立てる。

7 土の再利用と再生利用

基本的に土は何回も使う。

- ① 栽培残渣を取り、広げて鉢底石、土、植物残渣に分けて数日乾燥する。ふるいで粗い土と細かい土に分ける。
- ② 鉢底石の上に前作残渣と粗根を細かく刻んで1~2cm入れる。微生物資材(バイオエース等)がなければ米ぬかなどの有機物を入れる。粗い土と堆肥とかき殻を混ぜて入れる。
- ③ 夏は太陽熱で消毒ができ、冬には枯葉、落葉、植物残渣で覆い休閑できる。

8 コンテナ野菜づくりのポイント

- ・有機物は植物性、発酵済み資材
- ・適温での栽培 (適切な季節)
- ・品種の選択 (あわせて良苗の確保)
- ・花も栽培しよう (野菜と平行して行う)
- ・可能な限りいろいろなものを栽培する
- ・基肥 (肥料) は少なめにし、追肥は有機液肥を使う
- ・日照の確保に努める
- ・農薬はつかわない (狭いコンテナには微生物が外から来ないので、死んだ土になってしまうため)

●より詳しく知りたい方は、佐倉朗夫著「有機・無農薬で安心! コンテナで育てる野菜とハーブ」(講談社)をご参照ください。

第2部 生ごみ堆肥を活かした野菜づくり～事例紹介

1. 社会福祉法人はぐるまの会（福田真さん）

はぐるまの会では12年前から障害のある仲間達と理想的な労働種目として野菜作りを実践してきました。5年ほど前あさお生きごみ隊と出会い生ごみ堆肥で野菜



作りを始めました。25年4月に宮前区水沢に稗原農園を作り新あさお生きごみ隊より「生ごみ堆肥」、富士通川崎工場より「のびのびグリーン堆肥」をご提供いただき野菜作りに使っています。ダンボールコンポストで野菜くずや給食残渣から生ごみ堆肥を作りました。川崎市の「新しい福祉農業モデル事業」の指定を受け、12種510株のハーブを育てています。ハーブは、ハーブティやハーブビールの原材料に使います。また、オオムギは他の団体と細工物に使います。私たちは「都市型福祉農園」という新しい福祉施設のあり方をこの川崎市から発信することを目標としています。

2. 川崎市立ごうじ保育園（鈴木麻里さん）

2012年5月、年長組を中心にコンポストで「生ごみ先生・吉田俊道氏方式」で生ごみ堆肥を作り始めました。

「コンポストセレモニー」と名付けた行事をスタートさせるに当たり職員は勉強し、保護者へは説明とお便りを出して準備を整えました。

「コンポストセレモニー」当日はまず子供たちに生ごみが堆肥に変わる過程を話し、給食室から出る生ごみと保護者からの提供の生ごみでスタートしました。有用微生物を“菌ちゃん”と呼び、細かくした野菜くずと土、ぼかしを混ぜて木枠のコンポストに移しビニールをかぶせ経過を待ちました。数日後、箱の中の白カビに驚き温度が上がっているのを体感しました。熟成期間を終えて畑や田んぼに入れ、コンポストの中で芽を出したものや種から野菜を育てました。田んぼにも米の籾をまきました。

追肥の為の堆肥を作ることになり50×70×40cmの木枠コンポストで生ごみ堆肥を作り始め、1期目10kg入りのビニール袋4袋の濃縮堆肥が完成、2期目も順調に完成、育った野菜は給食で食べました。生ごみから堆肥へのつながり、野菜づくりから食育へのつながり、そして次の子供たちへ引き継がれる輪が広がります。堆肥づくりから野菜やお米を育て、いちごのジャム、ユウガオからかんぴょう、麦わらでわらじづくりや正月用のし

め縄等いろいろ経験しました。“伸びろ伸びろ命の芽、育て育て生きる力”

3. 個人の取り組み

【山田和代さん】

2013年9月より普通ごみ収集が週2回になり生ごみをダンボールコンポストで堆肥にしました。はじめは面倒と思いましたが、今では何でもなく生ごみを投入しています。ダンボールコンポストに入れた野菜くずは菌の働きにより増えることがないのを確認しました。箱の中で芽を出したかぼちゃはおいしくいただきました。春から夏にかけては陽が良く当たり、野菜は良く育ちます。収穫した野菜は日持ちし、美味しく、日頃の食事は勿論のことお弁当にも入れています。



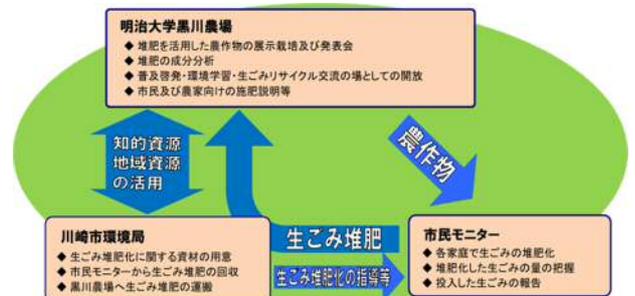
【由良直子さん】

3年前からダンボールコンポストで堆肥づくりをしています。野菜は良く育ち、花も咲き、花を付けなかったクチナシやアジサイも咲きました。8月にはエダマメ、オクラを収穫しましたが、インゲン、ゴーヤは失敗しました。花は私が、野菜は主人と役割分担が出来ています。果物の種もなんでもまいています。



4. 川崎市と明治大学黒川農場との連携した取り組み

生ごみ堆肥の有効性、安全性に対する漠然とした不安の解消や生ごみリサイクルの推進に取り組む川崎市と、地域との連携をコンセプトにした黒川農場が生ごみリサイクルに係る覚書を締結しました。この取組は、生ごみの堆肥化に取り組んでもらう市民モニターも重要な役割を担っています。



❁ 取り組みに対する佐倉朗夫氏の講評

自然と切り離せないのが農業です。野菜を栽培していると、自然のなせる技に驚くことがよくあります。生ごみ堆肥の活用もその一つで、家庭の生ごみを通して自然とつながっている皆さんの取り組みは素晴らしい。そして、ごうじ保育園の活動は、子どもたちの、身近で日常的な自然とのふれ合いに役立てている見事な事例です。

生ごみ堆肥を使って栽培した野菜の販売 (麻生区役所広場にて)

交流会の前1時間程、その朝収穫した野菜を販売しました。野菜を出すなど協力してくださったのは、麻生区の鈴木宏平さん、宮前区の織茂耕治さん、吉岡照充さん、高津区の河崎幸一さん、横浜市青葉区の近藤勇機さんの5人の農家と、「野菜だいすきファーム」、社会福祉法人「はぐるまの会」のみなさんです。



当日の朝、車で集めて廻った野菜は、大根、ネギ、小松菜、ほうれん草、ハーブ、柿、山わさびなど18種類ありました。テントや看板の他、木の根元に並べた20本の聖護院大根が目を引きつけたのかも知れません。ちょうど市民館の催しに向かう人がたくさん通りかかったこともあったのでしょうか。事前の心配が吹っ飛ばされ売れゆきでした。それだけに販売に忙しく、「生ごみ堆肥を使って栽培した野菜」であることを十分に伝えられなかった人もいます。もし次回ということがあれば、野菜袋にメモを入れて知らせたいと思います。

開会にあたり 環境局減量推進課長 武藤良博

本市の廃棄物行政は、「地球環境にやさしい持続可能な資源循環型のまち」を基本理念として、3Rの推進に向けた取り組みを市民の皆様、事業者の方々に御協力をいただきながら進めてまいりました。

そうした中、今年度は本市の廃棄物行政の節目の年として、「プラスチック製容器包装の全市拡大」と同時に「普通ごみの週2回収集」と、収集体制の変更を実施いたしました。市民の皆様の御協力により、概ね順調にスタートを切ることが出来ましたことを、この場をお借りいたしまして、改めまして感謝申し上げます。

プラスチック製容器包装の分別収集の実施により、普通ごみに占める生ごみの割合が大きくなっていることが実感できるかと思えます。この生ごみを削減するためには、必要な食材のみを購入したり、食べ残しや調理くずを極力出さないようにすること、さらに、発生した食べ残しや調理くずをリサイクルしていくことが、これまで以上に注目を集めていくことと思われまます。

持続可能な循環型の地域社会を構築し、川崎のまちを環境への負荷が少ない、きれいなまちにするためには、引き続き皆様の御協力が不可欠でございます。より一層の御理解と御協力をお願い申し上げます。

生ごみリサイクルは協働で！ 実行委員長 飯田和子

昨年度から、それまで市民がすすめてきた生ごみリサイクルの交流を、このような協働の姿で、環境局と実行委員会とご一緒に開催することが出来て本当にうれしく思っています。

交流会の目的は、生ごみリサイクルをすすめること。そのために、生ごみリサイクルに関わる市民同士や農家、教育機関などつながりを強めることです。そしてこの取り組みは川崎市との協働ですすすめることでもっとも効果をあげることができるのです。

さらにご報告がありましたが、今年度、川崎市は生ごみリサイクルに関して明治大学黒川農場と連携した取組を始め、私たちはとても注目しています。

実行委員会には、実際に生ごみリサイクルに携わっている団体が参集しました。私たちは、生ごみを燃やさず、堆肥化し土に還すことを日々実践し広めているのですが、地球上の生物は網目のようなつながりの中で生きて、人間もその中で生かされていることを知らされました。エネルギーも資源も限りあるものです。エネルギーを地域でつくり出すことを考え、資源の使い捨てはもうやめて循環型まちづくりをめざしたいと思えます。

● “ごみ” だった生ごみを堆肥として活かすと色々楽しいことができます。広がりを感じることができた交流会でした。♪会場では講師演題のお花の代わりにミックスレタスの小鉢が置かれました。♪終了後、はぐるまの会の提供によるレモングラスティを飲んでいただき、ひとときの交流を楽しみました。♪アンケートによると、大変好評でした。色々工夫しながら来年度も開催する予定です。どうぞご期待下さい。

かわさき生ごみリサイクル交流会実行委員会 2013

委員長 飯田和子 (新あさお生きごみ隊)
副委員長 阿部貴紅子 (かわさき生ごみリサイクルの会)
天野悦子 (環境を考え行動する会)、有島淑子 (新川崎ふるさとづくりの会)、奥山玲子 (近藤ルート会の会)、加藤伸子 (野菜だいすきファーム) 門平きょう子 (麻生・ごみゼロをめざす会)、竹内ふみ子 (エコグリーンクラブ)、中村祥子 (川崎市生ごみリサイクルリーダー) 福田真 (社会福祉法人はぐるまの会)、藤井恒夫 (川崎

区生ごみリサイクルの会)、柳下博子 (幸・循環型社会を考える会)、和田三恵子 (川崎市地域女性連絡協議会) 事務局 (川崎市環境局減量推進課) : 武藤良博、入江真久、須賀治
連絡先 : 川崎市環境局減量推進課 電話 044-200-2605

かわさき生ごみリサイクル交流会だより第2号編集 : 飯田和子、中村祥子、和田三恵子